

科学よもやま話

第11回

聖ニコラスと サンタクロースのプレゼント

佐藤勝昭



今月お届けするスケッチはルクセンブルグの市庁舎前の広場(プラス・ダルム)で見たクリスマスマーケットの風景です。ヨーロッパではクリスマスの前4週間はアドベントといってクリスマスの準備期間が行われます。各地の広場には、クリスマスマーケットが立ち、ツリーの飾りやプレゼントを買う人で賑わいます。ここで、グリュウワインというホットワインを飲みました。レモンを入れた大きな容器でワインを温め、コップに注いで売っています。

ヨーロッパには、12月に2度祝日があります。6日の聖ニコラスの日と25日のクリスマスです。聖ニコラスの日には、集会所に子どもたちが集まり、大司教の帽子をかぶり聖ニコラスに扮した人がやって来てお説教をしたあと、よい子にプレゼントを渡します。一方、クリスマスの方は、教会のミサに参列して静かにキリストの生誕を祝うのです。

サンタクロースがクリスマスにやってきて、子どもたちにプレゼントする現在の風習は、米国起源です。オランダ移民が聖ニコラス(オランダ語でシンタークラス)の日の習慣をクリスマスに

持ち込んだのが始めだといわれています。最近では、クリスマスにプレゼントを贈る習慣がヨーロッパに逆輸入され、子どもたちはプレゼントを2回もらえて大喜びです。

これは風習の逆輸入の例ですが、文化の逆輸入は、美術にも見られます。現代日本人の大好きなマネ、モネ、ゴッホ、セザンヌらフランスを舞台に花開いた印象派の絵画は、北斎、歌麿ら日本の浮世絵の技法が大きな影響を与えていたことはよく知られています。

科学や技術の世界では、逆輸入や相互交流は日常茶飯事です。液晶ディスプレイのプロトタイプは米国発ですが、日本の技術が薄型テレビという信頼性の高い家電製品にまで深化させ、米国に逆輸入されています。(もっとも、最近では日本のお家芸が韓国に奪われているようですが。)高感度の磁界センサとして有望な磁気トンネル素子¹の理論は米国オリジナルですがそれを再現性よく作製する技術は東北大学によって開発されました。すると、その技術に目を付けた米国の企業がMRAM²という不揮発性メモリ素子のプロトタイプにまで仕上げました。そして、この技術は日本に逆輸入され、次世代メモリチップとして開発研究が進められています。

科学技術の国際化の進展とともに、このような国境を越えた技術のキャッチボールはますます盛んになることでしょう。これこそが、科学技術発展という豊かなプレゼントを人々にもたらす「サンタクロース」ではないでしょうか。



ルクセンブルグ市庁舎前のクリスマスマーケット風景 佐藤 画

¹ 極薄の絶縁物を金属磁性体でサンドイッチした構造の素子。大きな磁気抵抗効果をもち磁界感度が高い。

² magnetic random access memory